

# 琉球における仏教説話の歴史地理学的研究

## －耳切り坊主を事例に－

仲宗根春香

(佐々木高弘ゼミ)

### 目 次

- はじめに
- I 耳切り坊主
- II 琉球における仏教

- III 大村御殿の怪異空間性  
おわりに

### はじめに

多くのメディアを通して知られているように、沖縄には本州とはまた違った、独自の伝統文化がある。檀家となることも氏子となることもなく、節目には祖霊を信仰し、各家庭の火の神や一族の仏壇・位牌を拜んでいる。墓も寺にはなく、霊園のような所や、道端で見かけることすら珍しくない。これは民話においても例外ではなく、沖縄に伝わる民話の多くは神・精霊・動物であり、人も多くは英雄やただの村人であり、少なくとも僧侶の登場する話は限られている。その中でも耳切り坊主は沖縄における怖い話としても、子守唄としても、一定の知名度を誇る。この論文の目的は、①そんな耳切り坊主がどういった背景をもって語られたか、②なぜ崇ると語られているのは耳切り坊主なのか、③そしてどんな理由があって大村御殿に出ると語られたか、この三点を明らかにすることである。

### I 耳切り坊主の伝承

#### (1) 諸事例から見た耳切り坊主

その昔、黒金座主くろがにざうしという方が、居たそうなんだよ。

その人は、支那で、学問を受けたそうだよ、むこうで、そのようにして、支那の坊さまの教育を受けながら、それで術を習っていたそうだよ、それで術をかけるのを、それも習って来て、そこか

ら卒業して帰って来て、ある寺に、沖縄に帰って来て、寺にかくれて、そしてそこで、三世相さんじんそー(易者)をしていたそうなんだよ。

三世相をしたので、どうももう三世相というのは、女が主に買いに行っているだろう、すると女の貞操を犯してばかりで、術をかけてばかりで、その時から、そのことが世間に広まったそうだよ。

うわさが広まったので、首里城の王様にそのことを申しあげて、こいつを長く置いておけば、世間を乱すし、ついでにこいつは、何としてでも取ってどけないわけにはいかん、と行って、お考えになって、その人を取る役目は、北谷王子ちやたんに命じられたそうだよ。

北谷王子は、「はい私がやりましょう」と、引き受けて、それでその、黒金座主を、最初は、どんなふうにやつつけたかといえば、呼びよせて、北谷王子の家にお呼びになったので、「あー御用だそうですが、どういう用でしょうか」と言ったので、「お前と今日は、碁を打とうと、思って、呼んだんだが」「はい、いいですとも、それで、どんなふうにして、碁を打ちましょうか」と言うので、「うん、今回はまず、かけをして打つことにしよう」とおっしゃって、北谷王子がおっしゃって、「それではまず、お前が負けたときには、耳を切ることにしよう」と、また「それで、あなたが負けた時には」と言うので「私が負ければお前に、お前の好きなようにされてよかろう」と、そう約束して、碁を打ったそうだよ。

そうして、碁は北谷王子にはかなわず、王子に術をかけて、逃げようとするのだが、王子に術はかからなかったそうだよ。

「それで、お前とは、約束通りに、耳を切る約束だったんだから」と、耳、片耳を切ってしまったそうだよ。

それで、切ってしまったので、それから耳を切られてしまったので、またも術をかけて逃げようとしたので、その時に、北谷王子に捕えられたので、それから、耳切り坊主が立っていると、いったそうだよ。

その時に殺されたので、もう怨として、その北谷王子の家には、男の子が生れると、みんなその耳切坊主に取られて、育たなかったそうなんだ、女が生まれると何ともなかったが。

そうこうして、何度もそのように男の子が育たなかったで、そこの家の女が、乳母考えで次に男の子が生れた時に、また取られてしまっはいけないと思って、お考えになって、大きい女の子が生れています、と言うと、それから後には、男の子も育ったそうだよ。

その時から、今男の子が生まれると、大きな女の子が生れています、という言葉は、その時から出たそうだよ。

そうして、この歌が歌われ出しているそうだよ、あの子守歌が。

へいよーへいよー泣くなよー

うむらうどうん かど  
大村御殿ぬ門なかい  
みみ ちり ぼうじ  
耳切り坊主ぬ立っちゅんどー  
いくたい  
幾人幾人立ちよがやー  
みつちやいゆつたい  
三人四人立っちゅんどー  
いらな しぐー む  
鎌ん小刀ん持ちゅんどー  
へいよーへいよー泣くなよ

その耳切り坊主にかけた歌だそうだよ<sup>(1)</sup>。

この子守唄は微妙に歌詞に違いがあり、事例中にあったのは泣く子供をあやす歌であるが、

夕さんで市かい出ちんなよ  
大村御殿の門なかい  
耳切り坊主の立っちゅんどー  
幾人幾人立っちよが  
三人四人立っちゅんどー  
いらなん刃も持っちゅんどー  
泣ちゆる童や耳ぐすぐす  
ハイヨーハイヨー バルバルバル<sup>(2)</sup>

といったように、夜遅くまで遊ぶ子供を嗜めたり、泣く子は耳をぐすぐすと切られてしまうぞというふうに脅したりするような歌詞が入っていることもある。

その他事例は表1の通りである。

上記の事例の多くは女性を騙した、乱暴したなど女性に関して何らかの道徳に反する行為を行う者として語られている。つまり多くの場合が、女

表1 「耳切り坊主」の事例集

番号	タイトル	伝承地	内容	備考
1	黒金座主と北谷王子 <sup>(3)</sup>	国頭村	三世相であった黒金座主は、占いに訪れる女の人に催眠術をかけ、いたづらしていた。それを聞いた北谷王子は妻を試しに行かせると、他の女の人たちと同じ目に遭った。それで黒金座主と碁を打つことになった北谷王子は負けた方は耳を切るという約束で碁を打ち、勝利した。それから歌にあるように、耳切坊主が化けて出るようになった。北谷王子に子供が生まれても、耳切坊主に取られてしまうので、男が生まれたら女だと言った。また、七つまでは女の子として育てた。	・歌あり ・黒金座主が逆恨みをして、死後敵を討っているとしている
2	北谷王子と黒金座主 <sup>(4)</sup>	読谷村伊良皆	黒金座主は北谷王子と碁を打って負け、出て行った。黒金座主はとても悪い人間だった。	・産育習俗由来なし
3	黒金座主 <sup>(5)</sup>	読谷村長浜	「女の人の安全のために耳切り坊主を殺さなければならない」と考えた吉村御殿に命じられた北谷王子が、耳切坊主と碁を打ち勝利し、退治した。その後北谷王子に二度男子が生まれるが死んでしまうので、生まれた時「大女が生まれた」といった。自分たちもそのように言ってきた。	・耳切坊主は波之上に住む

## 琉球における仏教説話の歴史地理学的研究－耳切り坊主を事例に－

4	黒金座主 <sup>(6)</sup>	読谷村瀬名波	坊主御主の時代に、黒金座主と言う忍術を使う坊主がいた。黒金座主は術を使って美しい女は全て自分のものにしたという。坊主御主は叔父の北谷王子に退治を命じ、北谷王子は賭け囲碁に勝ち座主を殺した。 これを恨んだ黒金座主に生まれた男の子を殺されるので、大女が生まれたとって逃れた。	・最初に負けた時に耳、次に鼻、最後に命を取った
5	黒金座主と北谷王子 <sup>(7)</sup>	読谷村儀間	黒金座主が女達に術をかけて騙し歩いているという噂を耳にした北谷王子は、奥方と妾を黒金座主のもとへ行かせた。すると髪が乱れて帰ってきた。噂は本当だったと知った王子は、碁の勝負をして、負けた座主は耳を切られ、殺された。その時に子孫の命を取ると言われた北谷王子は男の子が生まれたら「大女が生まれた」と言って難を逃れた。	・男より女の方が霊力が高いから命を取れない。だから昔は女だと「大男が生まれた」男なら「大女が生まれた」といった
6	黒金座主と北谷王子 <sup>(8)</sup>	読谷村宇座	民で忍術を習った黒金座主は、術で女を騙してばかりいたので国王が北谷王子に殺すよう命じた。黒金座主は北谷王子と碁の勝負をし、両耳を削がれる。「耳二つ無くして迷惑をかけるより殺してくれ」と言ったので、北谷王子は黒金座主を殺した。それから大村御殿の周辺から夜な夜な耳切り坊主が出るという。	・産育習俗由来なし ・歌あり
7	黒金座主 <sup>(9)</sup>	読谷村波平	黒金座主は女を騙す易者で、術をかけて乱暴した。友達である仲里按司は本当のことかどうか確かめるために妻を行かせた。すると騙されて乱暴されて帰って来たので黒金座主と、座主が負けたら耳を、仲里按司が負けたら命を取る約束をして碁を打ち、勝って耳を切った。それで男の子が生まれたという度に、その男の子の命を取られるので「大女が生まれた」と言うようになった。	
8	黒金座主と北谷王子 <sup>(10)</sup>	読谷村親志	黄金作りの刀には魔よけの力があり、そのおかげで北谷王子は術にかからなかった。黒金座主が妻に乱暴したことを知った王子は黒金座主を殺そうとする。黒金座主が隠れたので、そこに立っているとしたら、このように刺殺してしまうのだがと、屏風に刀を突き刺すと、その後ろにいた黒金座主に刺さった。この刀というのはムラサミという刀のように魔剣であった。	
9	黒金座主 <sup>(11)</sup>	読谷村都屋	昔、首里に黒金座主という偉い坊さんがいたが、良家の婦女を騙してよからぬ事をした。ある武士がその黒金座主を討ち取り、その時に耳を手足を切られて死んだ。その時に「二度、三度生まれ変わって崇めてやる」と言った。それがわらべ歌の耳切り坊主。	・産育習俗由来なし ・歌あり
10	黒金座主と北谷王子 <sup>(12)</sup>	読谷村牧原	黒金座主が術を使いあちこち荒らしまわっていると聞いた北谷王子は、黒金座主のもとへ行った女の人の髪が乱れているのを見て女を騙すことを確信した。そして出向いた北谷王子は黒金座主と碁を打ち、逃げようとした黒金座主をたたき切ってしまった。悪者だから遺骸は人通りの多い十字路に葬った。大村御殿に黒金座主が逆立ち幽霊となって現れるようになった。	・産育習俗由来なし
11	北谷王子 <sup>(13)</sup>	読谷村大湾	北谷王子に嫉妬した耳切り坊主が、子供が生まれる度に奪ってしまうので、北谷王子は男が生まれたら女が生まれたと言った。	
12	黒金座主 <sup>(14)</sup>	読谷村古堅	黒金座主が人を騙すのか確かめるために妾を易者に行かせると、後ろ髪がゆがんでいた。黒金座主は碁を打っているときに術をかけて眠らせて逃げようとした。碁を打つときに賭けをしたらしく、北谷王子に負けた黒金座主は耳を切られた。北谷王子に男の子が生まれ、その通りに言うとう亡くなったので、性別を反対に言うとう助かった。	・黒金座主があまりに悪者なので耳切り坊主にした、とある

13	黒金座主と大村御殿 <sup>(15)</sup>	北谷町	黒金座主は催眠術、忍術、気合術など全部身に付けた人であったが、大村御殿の主に殺された。それで大村御殿になかなか男の子が生まれ育たず、やっと生まれたので、大女が生まれているよ、と言うと命を取られなかった。	・黒金座主の悪行に関する言及なし
14	大村御殿 <sup>(16)</sup>	那覇市首里儀保町	若狭町の護道院というお寺に有名な黒金座主という坊主がいた。その坊主は悪いことをしたため、王様は大村御殿の御元祖の北谷王子に黒金座主を殺すよう命じた。黒金座主と北谷王子と碁を打って遊んでいるときに、黒金座主が北谷王子をまよわせて、囲碁を負かそうと、呪殺しようとする。しかし北谷王子は黒金座主のいのりには負けずに、北谷王子が黒金座主を負かして殺した。その遺念が残って、夜な夜な耳切り坊主が大村御殿に現れるようになった。大村御殿に男の子が生まれても亡くなるので、このときから大村御殿の家族たちは男の子が生まれると大女が生まれたというようになったという。	
15	黒金座主と子守唄 <sup>(17)</sup>	不明	尚敬王時代、那覇若狭町の護道院に黒金座主という怪僧がいた。座主は、魔術を使って世人をまどわし、若い娘などを犯していた。これを聞いた北谷王子朝騎は座主の成敗の機会を狙っていた。王子は座主を、碁の相手として邸に誘い、座主と鬻と耳を賭けて碁盤を囲んだ。劣勢になった座主は王子に術をかけて逃げようとしたが、気がついた王子に両耳を斬り落とされたあと殺された。その後、大村御殿の前に耳切り坊主が出るようになった。その崇りか、大村家に男の子が生まれると早死にするので、男の子が生まれても大女といって、その崇りをさけた。この風習が田舎までも広まったという。	・歌あり ・注釈に、「座主が琉球王府の政治批判をして北谷王子の肅正によって殺されたのではないかと考えられる。」とある。
16	魔法使いの坊さん <sup>(18)</sup>	不明	若狭町護道院に黒金座主という坊さんがいた。信者を眠らせて金品をまきあげ、また首里城内の宝物を盗み、美しい腰元たちに悪さをした。そこで王は武芸の達人に討伐に向かわせるが、うまくいかない。そこで北谷王子が宝剣治金丸を携えて護道院にでかけ、碁を打った。黒金座主は王子に術をかけ、眠らせようとしたががからず、逆に両耳に斬りつけられ、そのまま斬り殺された。その晩から大村御殿にその亡霊が現れたので、北谷王子は切りつけた。しかし今度は大村御殿に男の子が生まれても死んでしまうので、女の子が生まれたとふれあるくと、男の子が死ぬことはなくなった。	(昔話)

性に手を出すような、あるいは詳しくは語られなくとも、とにかく悪い僧侶であったとしている。

## (2) 耳切り坊主の立場

以上のように、この話では黒金座主は悪役として語られる。謂われなくして殺され、恨み崇った存在ではなく、むしろ悪いことをして裁かれておいて、自分に手を下した北谷王子を逆恨みし、崇るのだ。

しかしその一方で、真言宗のお寺である護国寺の住職が書いた『沖繩仏教史』には、「盛海和尚(黒金座主)は北谷王子の悪政を責めたため王子に殺

される<sup>(19)</sup>」とある。また読谷村民話資料集にも同様のことが注記されている。

つまり仏教側からみれば北谷王子が悪者となっているのだ。ここに、北谷王子と仏教が対立する構図がみえる。

## II 琉球における仏教

### (1) 琉球仏教の流れ

ではその対立構造の一方である、仏教勢力はどのようなものであったか。そもそも琉球王国とは、15世紀頃に成立した、日本とはまた違った道を歩んできた国家であった。仏教においてもまた然

りで、17世紀初頭に幕藩体制へ組み込まれても寺請制度が導入されることはなかった。そんな琉球において、仏教は鎮護国家の体質が強いものであり、またその財源も国に依るものであった。なかでも禅僧は琉球侵入における菊隠和尚のように、日琉間における外交官の役割を果たし、琉球王家と非常に近い関係にあった。王家菩提寺の円覚寺、天王寺、天界寺はいずれも臨済宗妙心寺派で、またかつて那覇と本島を結ぶ長い橋である長虹堤の出発点にあった崇元寺も臨済宗寺院だった<sup>(20)</sup>。臨済宗が先頭に立つ形で、王国の保護のもと、仏教は発展していたのだ。

また首里にある寺院の多くは臨済宗のものであった。図1は、首里古地図と琉球国由来記<sup>(21)</sup>をもとに作成した分布図である。御嶽がほぼ全体に散らばるように位置しているのに対し、多くの寺院が首里城と主要街道である綾門大道に近い位置に集中している。そして真言宗寺院に関しては、臨済宗寺院に比べその数は明らかに少ない。つまりこの王城や街道との距離の近さと数は王府

との密接さを示していると言え、ここにも琉球仏教界における臨済宗の優位性を見ることができる。勿論祝女の頂点にあった聞得大君は国王の身内であり、此方とは比べるべくもないのだが、御嶽は全島にあり、また祝女もそれぞれ全島の御嶽を掌握していた。民衆とも縁の深かったそれらに比べ、仏教は一般にはあまり浸透しなかった。わずかにエイサーやミルク信仰が残るだけである。

しかし1663年になると、薩摩により説法の禁止と儒教奨励の方針が打ち出される<sup>(22)</sup>。さらに1672年には知行高の減少<sup>(23)</sup>、1683年には勧進・托鉢行為を禁止された<sup>(24)</sup>日本のように仏教が浸透していない中で、これらの禁止は実質財源を王府のみに頼らざるを得ない状況に追い込まれることとなる。その知行も、すでに減らされた後のものであった。1714年にはそれまで京都五山まで赴いていたのに修行地を薩摩領内に限定され、またその年数も15年以内に規定される<sup>(25)</sup>、といったように徐々にその行動範囲を狭められていった。そもそも僧侶が日本との外交官の役割を担う



図1 寺院と御嶽の分布図

ようになったのも、その留学経験があるからこそのものであったのだ。ところが那覇には薩摩在番奉行所が置かれることで薩摩と王府が直接やり取りをすることとなり、仏教勢力は国政に参加する機会を失っていった。また、地方から弟子を採用し、出家させることを禁止されている<sup>(26)</sup>。

ではそういった状況の中で、僧侶はどのような活動を行っていたのだろうか。『琉球国旧記』の公事に関する項目で確認できる。

表2もまた禅僧の割合が高い。やはり王族の菩提を弔うだけあって多くは七夕や施餓鬼等祖霊祭祀に関わる行事でその姿を現すことが多い。またそれと関連して聖主万歳・子孫繁栄・国泰民安の祈禱、配帙献じを行っていたようだ。一方の真言僧は、護国祈念の御修法やおはらいを主とし、「いのる者」としての印象を強くしていたようだ。同じく祈りを捧げるものであった祝女はその登場回数も仏教全体とほぼ同等で、主に収穫祭や豊作祈願を行っていたようだ。また有事の際においても僧侶が祈禱を行うことはあったようだ。例えば尚敬王8年(1720)4月22日には首里城で怪しい光が見えたと言言僧が祈禱し<sup>(28)</sup>、尚瀬王の頃に

は1824年と1832年の二度、渇水のため護国寺と円覚寺にて雨乞いを行った<sup>(29)</sup>。尚泰王10年には祈雨の報祭を行い、これも真言・禅僧両方が報祭の命を受けた<sup>(30)</sup>。明和の大津波(尚穆王20年3月10日)の際は国王自ら諸官を率いて崇元寺・円覚寺・天王寺に詣で、僧侶は円覚寺・護国寺にて祈禱を行った<sup>(31)</sup>。これらのことについて知名定寛史は、基本的に王府の命令によって祈禱を行っていると言『琉球仏教史研究』で指摘している<sup>(32)</sup>。つまり公事であれ有事の際における祈禱であれ、行動の主体性は王府にあったといえる。様々な規制と王家との密接すぎる関係の末、財源を王府に依存した状況にあった仏教界は、あくまで王府の管理・統制下にあったのだ。

しかし一方で、『伊江親方日々記』には、有力者と関わっていく僧侶の姿が見受けられる。幕藩体制に組み込まれて以降、和文学が盛んに流入するようになった。それに伴い、有位者の子息へ仮名文字や漢字の読み書きなどの初等教育を行うようになった<sup>(33)</sup>。また真言宗寺院へ孫の病氣<sup>(34)</sup>や家の吉凶に関する占い<sup>(35)</sup>を頼んでいる。同年には洗骨に参列する禅僧の姿が確認することがで

表2 琉球国における仏教関連行事<sup>(27)</sup>

『琉球国旧記』における見出し	宗派	備考
社参	両	元旦と一五日
僧の配帙献じ	禅	
正月三日三寺行幸	禅	
正月十一日	真	五月と九月にも行う
御参詣	禅	弁財天堂、弁之嶽、末吉権現、観音堂、識名権現へ
甲子祈願	禅	聖躬万歳・子孫繁栄・国泰民安の洪福を祈り、翌日配帙献上。九月にも行う
恵日拝礼	禅	
竈清め	真	五月と九月にも行う
彼岸	禅	王は僧に食事を供養する。秋も同様
3月3日	禅	円覚寺より桃花献上。端午には菖蒲葉、重陽には菊
灌仏会	禅	
七夕行幸	禅	三寺行幸
施餓鬼	禅	
忌日	禅	
年忌	禅	
仏名会	真	護国祈念
歳暮	両	
歳末配帙献上	禅	
天界寺年籠	禅	

きる<sup>(36)</sup>。また引退士族と一日中囲碁の対局をする僧侶の姿も描かれておる<sup>(37)</sup>。例えば嘉慶18年(1813)4月9日に伊江親方朝睦は本立寺・天王寺・瑞祥寺長老衆を招き、碁会を開いた。翌日には天王寺長老を再び招き囲碁を打った<sup>(38)</sup>。『沖縄仏教史』によれば、茶道や華道、書道や絵画を始めとした、士官のために必須であった教養のいくつかは僧侶より教わっていたもので、囲碁についてもまた僧侶の手になったものであった<sup>(39)</sup>。

このような士族層との関わりから、時に奉公先の仲介や処分の軽減の口添え等、様々な便宜を図っていたようだ<sup>(40)</sup>。とはいえバジル・ホールは『朝鮮の西海岸及び大琉球探検記』の中で、こう記している。「琉球では僧侶は非常に尊敬される階級であるどころか、最も下級のものと考へられて居るのであつて、たとひ輕蔑されてゐないにしても、ほかのあらゆる階級の人々によつて、少くとも無視されてゐるのである<sup>(41)</sup>」。

## (2) 黒金座主

そういった仏教、真言宗を取り巻く状況の中で、黒金座主とはどういった存在であったのか、あらためてこの項でみてみようと思う。I(1)の事例中の子守唄で、「三人四人立ちゅんどー」とあった。耳切り坊主とは一人のことを指すのにも関わらず、三人四人とはどういうことだろうか。これについては、かつて大村御殿家で行われていた怨霊慰撫の祭が関係していると考えられる。彼岸の頃に、玄関に親坊主(黒金座主)への供物を供え、小坊主への供物を中庭に供えたそうだ<sup>(42)</sup>。三人四人というのは、この小坊主も入れた人数なのではないだろうか。黒金座主はどうやら、小坊主を従える程度の身分にはあったようだ。その黒金座主のこととされる盛海和尚は、護国寺の住職であった。護国寺はもともと波之上神宮の一部で、14世紀頃開山とされる、琉球第一の真言宗寺院である。「耳切坊主」として語られる頃には、護道院で隠居生活を送っていたとはいえ、十分な権力者であった。

また『琉球国旧記』によると、1692年に「住持の盛海和尚が書類をもって、知事僧を設けることを請うた」とある。これにより知事僧が置かれることとなったのは、一つの項目として由来が語

られている時点で明らかであり、この記述から真言僧もある程度発言力が認められる程度には台頭していたと考えられる。『琉球仏教史の研究』では、この動きを護国寺を頂点とすることで真言宗の組織化を行い、そうして臨濟宗の寺院と同じく利権に与ろうとしたのではないかとしている。つまり、黒金座主は真言宗を盛りたてようとする僧侶だったといえる。実際、『琉球国由来記卷十』には、「禅窟変密門事」として、かつて禅宗寺院であった神応寺、万寿寺、聖現寺が真言宗寺院となっている<sup>(43)</sup>ことから、真言宗は確実にその琉球における勢力をのぼしていたと考えられる。しかし、結局は前項で取り上げたように、仏教全体として、官寺への支出は徐々に抑えられ、僧侶の行動も制限されていくこととなる。

## (3) 北谷王子

黒金座主こと盛海和尚が密門の興隆をねらう僧であった一方で、北谷王子はどうであったか。「北谷王子」と呼ばれる人間は、二人確認することができる。一人目は北谷朝愛(1650～1719年)。尚質王の第四子で、1689年に摂政に就任し、在任中に家譜編纂が行われている。もう一人は北谷朝騎(1703～1739年)。尚益王次男で、後継ぎがいなかったのか、朝愛の養子となった。20歳より終生摂政であった<sup>(44)</sup>。

『琉球民話集』ではこの二人のうち、朝愛を北谷王子としている。前項の『琉球国旧記』の記述では、18世紀初頭前後のこととあり、黒金座主は護国寺の隠居寺である護道院に住んでいたことから、この頃すでに隠居していた老齢の僧侶だったと考えられる。隠居寺があるということは、一生護国寺の住持でいるわけではないということだ。そもそも日々の御勤め以外に、行事とその準備を行うのだ。行事をまわすにはある程度の体力と知識や経験が必要で、30～40代あたりが妥当と思われる。ちょうどそのくらいの年齢の時に知事僧を設けることを要請し、北谷王子に退治された頃には、それを越えた年齢であった。そして退治した北谷王子は討ち手に命じられるほど若く、勇猛果敢な青年であったといえる。このことから、やはりモデルは朝騎の方であったと考える方が適当だろう。

#### (4) 蔡温の政策と儒教

さて、その朝騎と同時代に、蔡温という人がいた。1682年久米村に生まれ、尚敬王がまだ王世子、つまり皇太子であった時に近習となり、またその教師として幼き尚泰王の側に在った。尚敬王即位後も要職に就き、1728年に三司官にまで上り詰める。三司官は摂政の下にあり、政務の実権を握る、実質琉球王国のトップの役職といえる<sup>(45)</sup>。蔡温は琉球におけるチャイナタウンたる久米村で生まれ育ったからか、その思想は徹底して朱子学に基づいている<sup>(46)</sup>。琉球はかつて中継貿易で発展した国であったが、この頃にはそれによる利益も微々たるもので、赤字財政が続いていた。既に17世紀半ばに羽地朝秀により女官の影響力排除、儀礼の簡略化を行われていた。寺院知行の削減もこの頃で、羽地が摂政就任中は寺院の創建も再建も修復ですら、皆無であった。それでもなお財政は苦しく、蔡温はさらに合理化を図るため、トキ・ユタの禁止や、儀礼の制度化・簡素化、そして寺院を王国の管理下に置く政策を打ち出した。蔡温は王国のために、迷信を打ち破り、合理化により財政を立て直すことを目的としていたのだが、それを快く思わない者もいたようだ。在番奉行へ為政者、蔡温の誹謗の投書があった。後にその犯人とされた平敷屋朝敏らは処刑されている<sup>(47)</sup>。そうしてまで行われた支出の削減政策の対象に仏教も当然ながら入り、住職未経験の隠居した僧侶への給米をカットし<sup>(48)</sup>、地方から弟子を採用し、出家させることを禁止し、知行を新たに規定し、僧侶の身分制や装束の制定を行った<sup>(49)</sup>。そうして蔡温は寺院を王国の管理下に置いた<sup>(50)</sup>。しかし住職を経験していなければ隠居後に給米がもらえないということは、僧侶になったところで老後の保障はほぼ何も無いことを意味する。そうすると出家する人間は減ってしまうものだが、さらに出家の制限もされ、蔡温の政策は仏教の衰退の一因となった。

その蔡温が政治の実権を握っていた時期と、北谷王子朝騎が摂政をしていた時期は重なる。北谷王子は政策を主導する蔡温の上の人間として、この蔡温と同じ立場の人間と見ることができる。つまり北谷王子と仏教の対立は、蔡温と仏教の対立となる。さらに蔡温はそれまでの薩摩からの方針

と同じく、いやそれ以上に熱心に儒教を推奨する<sup>(51)</sup>。このことから「耳切り坊主」は、儒教と仏教の対立が背景にあったと考えられる。

### Ⅲ 大村御殿の怪異空間性

#### (1) 蔡温の風水政策

では次にこの章では、耳切り坊主が大村御殿に出る、と語られ歌われた理由について、首里がどういった場所であったかを述べつつ、明らかにしていきたい。

Ⅱでも取り上げた、蔡温の政策。これにはまだ続きがある。国政の合理化を図り無駄な支出を減らすことを第一としていたが、同時に行政としては必要な支出も行っていかなければならない。その代表が羽地川の改修である。国頭郡にある羽地川は「その曲直は水性と相逆ら」い、大雨が降る度に氾濫しては民を悩ませていた。しかし琉球に治水の法を知る者はなく、ただその被害を受けるだけだった。尚敬王23年7月、暴雨により堤防が大きく崩れ、民田が尽く流されてしまった。そこで蔡温は「官僚を率ゐ、能く水性に従つて其水を改決し民田を重修」したという<sup>(52)</sup>。「改決羽地川碑」にも同様の記述がある<sup>(53)</sup>。蔡温はかつて清へ留学し、そこで朱子学や地理学、いわゆる風水を学んだ<sup>(54)</sup>。ここでいう「治水の法」とは、風水に基づくものであろう。風水において川と山の存在、在り方は重要であり、むしろそれこそを要素として家宅であれ墓であれ、そして都城であれ、良い場所を判断するのだ<sup>(55)</sup>。徹底して儒教、朱子学に基づいて政治を動かしてきた蔡温が、不可分の風水論をまた重要視するのも当然といえる。そうして川の流れを改めた蔡温は、同年、山を整えることにも着手する。かつて琉球において山林の法をよく知る者はなく、十数年後には材木が欠乏してしまうような状況にあった。そこで蔡温は尚敬王23年、官僚を率い、島内各間切の山林を巡見し、「山林の法」を教えた。そして山奉行と津口勤番を置き、山奉行には各所に住まわせ、竹や木の種を採り、それを育てて繁茂させた。津口勤番はその佳木を盗み売ることを禁じ、その警備をさせた<sup>(56)</sup>。そして「杣山法式帳」などを布達し、森林保護と管理の方法、知識等を伝え、制度を整えさせた<sup>(57)</sup>。材木を得るための行動であったが、



それだけではなかったように思われる。というのも、植林は生気を溜める手段であり、道路や河川の改修は龍脈の変更方法でもあったからだ<sup>(58)</sup>。



図2 風水の図

(朝鮮総督府『朝鮮の風水』国書刊行会, 1972, 17頁)

図2にあるように、山々が重なり、繁茂してこそよい気が巡るのだ<sup>(59)</sup>。

そうして環境を整えていった蔡温は、次に風水の良い土地に村ごと人を移住させていく。例えば浦添郡仲西村は風水が善くなく、昔から人が多くなかった。なおかつ井戸は遠く、甚だ不便である。外間原は首里那覇に近く、井戸も近く風水も良いので、仲西村を外間原に遷した<sup>(60)</sup>。

## (2) 首里の風水について

そうまでして風水に従った政治をしていた蔡温は、王都である首里に関してはどう見ていたのだろうか。首里城は西向きに建っていて、正面以外を山や崖に囲まれている。

この地に対し、蔡温は「土地は狭く、広く平らかな所がない。しかし気脈は申し分なく、国殿の向き、門の配置も良い。城の前を望めば馬齒山が海中より起ち、気の漏洩を防ぐ。左は小禄・豊見城の諸峰が青龍となり、右は北谷・読谷の山々が

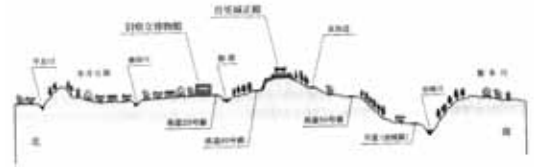


図3 首里の地形

(『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告(Ⅰ)－』沖縄県立埋蔵文化センター, 2010, 7頁)



図4 首里城の位置



図5 諸峰の位置

白虎として城都を護っている。その間にある港も良く、西原から島尻まで、城の後ろは密に茂った山々が護っている。弁が嶽、虎瀬、崎山御嶽及び遠近の林樹は繁茂してその盛気を扶ける。確かに北山や南山にはもっと開けた場所がある。しかし気脈や山川の在り方として首里以上の所はなく、これぞ国の都としてあるべき風水である。今後、これらを変えることがあってはならず、時に補修していかなくてはならない<sup>(61)</sup>」と評している。また当時あった本部半島を切り離す形で運河を作り、より平坦な土地である名護に都を移そうとする意見に対しては、「王城及びその丘は悉く皆龍脈に累る所であり、本部もまたこの龍脈に繋がっている。妄りに王城を移すべきではなく、山を開いて水路を作るべきでもない<sup>(62)</sup>」とし、三府龍脈碑を建てた。



図6 模式図

(古川博也『那覇の空間構造沖縄らしさを求めて』沖縄タイムス1989, 164頁) 図中の虎頭山は虎瀬山の事。

首里内部においては、雨乞御嶽、虎瀬山、弁が嶽は、小禄・豊見城、北谷・読谷、西原各峰々の先端としてそのまま近き青龍、白虎、玄武とすることができる。これらのことについて蔡温は重ねて、これらが枯れると気脈もまた衰えるので伐採してはいけない、よくよく植樹し、保全していくべきであると述べている。河川や港についても同様で、三府龍脈碑においても現状維持こそ最善とした。つまり、蔡温は「開拓しない」という都市計画をもっていたことがわかる。以降も、戦前まで首里の街並みに大きな変化はなく、現在でも各山は御嶽や公園として残っている。

### (3) 大村御殿

そんな首里内部における怪異の話はごくわずかであり、多くは周辺部にあった<sup>(63)</sup>にも拘わらず、大村御殿は首里城近く、首里の中心部にあった。別名を北谷御殿といい、首里城や龍潭池からは龍潭通りを挟んだ向こう、かつての中頭西海道沿いに位置していた。明治に入り、周囲の建物を合併し1ブロック丸々中城御殿となり、沖縄戦で焼失。1966年に沖縄県立博物館が建ち、それも2007年に移転。現在は首里城公園として中城御殿の復元整備が実施されている<sup>(64)</sup>。

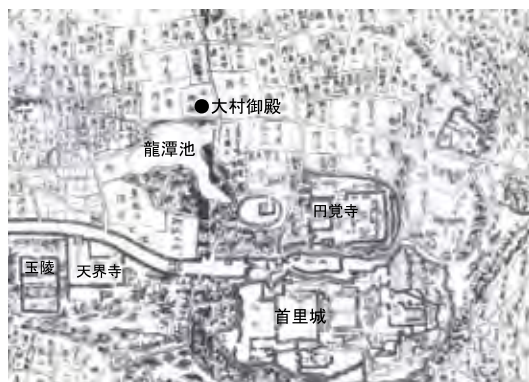


図7 大村御殿の位置  
(原図は首里古地図)

### (4) 街道について

図9にあるように、大村御殿の東側に中頭方西海道が通っていた。耳切り坊主はここに出たとされている。首里城を起点に、大村御殿を通り浦添市経塚を経て牧港で58号線に合流し、読谷村まで続く道<sup>(65)</sup>。そのまま国頭街道に接続し、沖縄本島の北端へ至る<sup>(66)</sup>。図8に示したように、図中の■、つまり首里城に全ての道は繋がっている。

首里の北境である儀保川にかかる太平橋は、浦添御殿の出身であった<sup>(67)</sup>尚寧王(1568～1620)が「政治の暇に、川を徒渡りするつらさを思召され」石橋を架けさせ、また道に石畳を敷かせた<sup>(68)</sup>。しかし同王の在位中に薩摩軍が琉球へ侵攻した際、この道を通って首里へ侵入し、太平橋は戦場となった<sup>(69)</sup>。また15世紀に琉球を統治した尚巴志は、北山に自らの次男を監守として置くほどには警戒していた<sup>(70)</sup>。第二尚氏の時代に至って諸按司が首里に移った後も監視は続いた。第二尚氏の始祖である尚円王の嫡子である尚真王は、三男

この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図200000（地図画像）を使用したものである。  
（承認番号 平19総授、第82号）

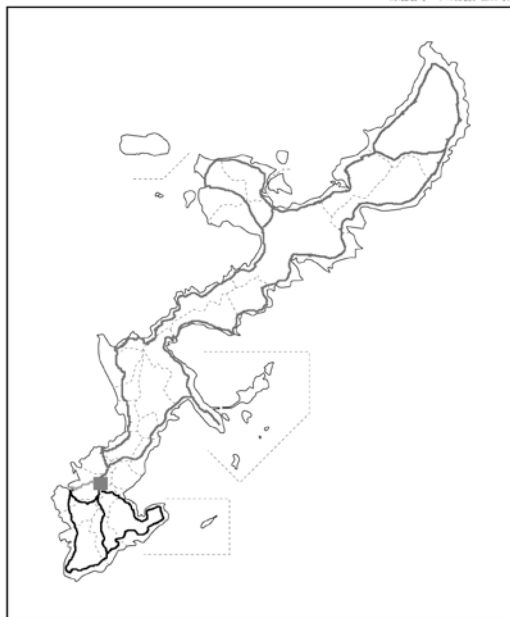


図8 街道の全体図



図9 中頭西海道と大村御殿の位置  
（首里古地図に筆者加筆）

昭威を置き、康熙4年（1665）までその子孫が監守の任にあたった<sup>(71)</sup>。いずれにせよ、中頭方西海道は恐ろしいものがやってくる道でもあったといえる。

#### （5）境界

大村御殿は町境、あるいはかつての平等境に位置する。平等とは、首里を三つに分けた区域のことで、図10の左から真和志平等、南風平等、西平等となっている。各平等には聞得大君御殿が管轄する三平等殿内があり、それぞれ真壁殿内、首里殿内、儀保殿内となっている。琉球全域の祝女



図10 平等境  
（那覇市旧跡・歴史的地名地図に筆者加筆）

殿内はその下にあり<sup>(72)</sup>、つまりこの三平等の祝女は他の祝女より上位にある。三平等殿内にはそれぞれ火の神がある。火の神とは各家庭の竈にあり、一家の福を守る神である<sup>(73)</sup>。三平等殿内はその元締めと考えられ、つまり各平等の祭礼を司っていたといえる。平等はそのまま一つの村として見ることができ、村境等、何らかの境目で怪異に遭遇する、という指摘はすでに先行研究でされている<sup>(74)</sup>。首里内部の話者で、出身のはっきりしているものは儀保町の人で、これは西平等に属する。大村御殿がある大中町は首里城に程近く、ある程度身分のある人が住まうことが多かった<sup>(75)</sup>。

対して儀保町は敷地の小さな、あまり身分の高くない人の家が多い。北側に位置する儀保町と王城の間に位置する。池端・真和志町ならともかくとして、儀保の人がわざわざ寒川や金城まで行くことはそうそうないだろう。ということは、大村御殿はこの語り手にとって、行動範囲の境目であるともいえる。人は怪談を語る時、よくよく見知った場所よりも全く知らない場所ではないがよく行く場所でもない処を選ぶ。それは山であり、川で



図11 大中町（首里古地図より）

あり、海であり、門であり、人気のないどこかであり、墓場であり、廃墟である。怪異とは非日常であり、そういった場所こそが非日常の象徴といえるからだ。だからこそ、この町境、平等境に耳切り坊主が出ると語られたのではないだろうか。



図12 儀保町（首里古地図）

#### (6) 龍潭池の存在

大村御殿の向かいには龍潭池がある。永樂15年（1417）、国相壊機が王命により明に赴き、礼楽文物の盛りを見、名山大山の荘を見た。琉球に帰った壊機は、王城の外、安国山の北に池を掘った。これが龍潭池である。そして様々な花木を植え、市民遊覧の地とした。つまり身分の低い人と高い人とが会おうことのあった場所であったとい

える。

安国山とは龍潭池の南岸の丘のことを指し、園比屋武御嶽がその一部である<sup>(76)</sup>。この園比屋武御嶽は祭礼や祈願があればかならずここで行列、行幸の際は国王自ら拝礼する<sup>(77)</sup>。現代でも東廻りという聖地巡礼の出発点である。

冊封使が来た時には、重陽の節句にここで爬竜船を浮かべ競漕させる<sup>(78)</sup>。日本において重陽節には神泉苑で舟遊びをしていた<sup>(79)</sup>。神泉苑というと空海による雨乞いの話が有名であるが、龍潭池でも雨乞いを行ったことがある。尚泰王10年3月、それまで何度か祈雨していたものの雨が降ることはなく、雨乞御嶽と弁が嶽に詣でて降雨を祈った。さらに爬竜船を龍潭池に浮かべ、山や藪を巡察させて放置された骨を集めさせ、地を選び埋葬させた。雨は4月に降ったという<sup>(80)</sup>。これらのことから龍潭池は神泉苑の役割を負っていたと言える。その神泉苑は御霊会の行われた場所でもあった。花や食べ物が供えられ<sup>(81)</sup>、舞楽等による御霊の歓待が行われた<sup>(82)</sup>。そうして害なすものを有益なものに変え、あるいは領域内から出て行ってもらうのだ<sup>(83)</sup>。龍潭池は憩いの場として作られたことから、北からやってきた恐ろしいもの、よくないものをここで歓待し、帰させようとしたのではないか。龍潭池は安国山を通し、園比屋武御嶽と一体と見ることができる。御嶽自体のみならず、龍潭池までも王城守護のはたらきをしていたのだ。

#### おわりに

語られる耳切り坊主は悪役であるが、仏教側からするとその限りではなく、むしろ真言宗の興隆を狙い、そして儒学の前に敗れ去った人物であった。そういった背景があって、この説話の中に崇る悪僧として登場したのだ。

その耳切り坊主が出ると語られた大村御殿は町や平等の境目にあり、また大村御殿は北方へ行くためには必ず通る重要な道の傍らにあった。この道は北山の反乱の可能性や薩摩軍の侵入といった脅威を運ぶ道であり、それを城内に入れよう押しとどめる園比屋武御嶽と同一の意味を持つ龍潭池の前に大村御殿はあった。そうして龍潭池でおしとどめられた「おそろしいもの」の象徴とし

て語られたのが耳切り坊主だったのではないだろうか。だからこそ、耳切り坊主が出るとされる場所は他でもないこの大村御殿であったと語られたのだ。

### 【注】

- (1) 伊芸弘子『昔話研究資料叢書別巻』三弥井書店, 1992, 107～111頁
- (2) 沖縄県教育委員会『沖縄県史 第23巻各論編11 民俗2』
- (3) 遠藤庄治・丸山顯徳・安里和子『南島昔話叢書4 国頭村の昔話』同朋舎出版, 1990, 28～31頁
- (4) 読谷村教育委員会『伊良皆の民話 読谷村民話資料集1』1979, 291～292頁
- (5) 読谷村教育委員会『長浜の民話 読谷村民話資料集3』1981, 265～267頁
- (6) 読谷村教育委員会『瀬名波の民話 読谷村民話資料集4』1982, 238～241頁
- (7) 読谷村教育委員会『儀間の民話 読谷村民話資料集5』1983, 261～264頁
- (8) 読谷村教育委員会『宇座の民話 読谷村民話資料集6』1984, 238～241頁
- (9) 読谷村教育委員会『波平の民話 読谷村民話資料集9』1989, 131～134頁
- (10) 読谷村教育委員会『土地・親志・都屋の民話 読谷村民話資料集12』1994, 169～170頁
- (11) 同, 300～301頁
- (12) 読谷村教育委員会『大木・牧原・長田 読谷村民話資料集13』1996, 229～231頁
- (13) 読谷村教育委員会『大湾・古堅の民話 読谷村民話資料集14』1998, 105～106頁
- (14) 同, 305～307頁
- (15) 北谷町史編集委員会『北谷町史 第三巻資料編2 民俗下』1994, 173～174頁
- (16) 那覇市企画部市史編集室『那覇市史資料編第2巻中の7 那覇の民俗』1979, 805～807頁
- (17) 琉球史料研究会『琉球民話集』1960, 290～293頁
- (18) 伊波南哲・浅沼良次『日本の民話26』ほるぶ, 1976, 136～140頁
- (19) 名幸芳章『沖縄仏教史』護国寺 1968, 233頁
- (20) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重『琉球史料叢書 第一』1962, 188～205頁
- (21) 同, 188～232頁
- (22) 知名定寛『琉球仏教史の研究 琉球弧叢書⑰』2008, 197頁
- (23) 桑江克英『球陽』三一書房, 1971, 102頁
- (24) 同上, 109頁
- (25) 同上, 174頁
- (26) 前掲22), 264～265頁
- (27) 原田禹雄 訳注『琉球国旧記』熔樹書林, 2005, 133～171頁
- (28) 前掲23), 141頁
- (29) 前掲22), 332頁
- (30) 前掲23), 391頁
- (31) 同上, 235頁
- (32) 前掲22), 334頁
- (33) 同上, 349～351頁
- (34) 沖縄県文化振興会公文書館管理部資料編纂室『沖縄県史資料編7 伊江親方日々記近世I』1999, 204頁
- (35) 同上, 284頁
- (36) 同上, 278頁
- (37) 同上, 456～457頁
- (38) 同上, 351頁
- (39) 前掲19), 82～86頁
- (40) 同上, 363～364頁
- (41) 須藤利一 訳『大琉球島探検航海記』野田書房, 1940, 67頁
- (42) 前掲16), 68頁
- (43) 前掲20), 222頁
- (44) 角川歴彦『角川日本姓氏歴史人物大辞典47 沖縄県史氏家系大辞典』1992, 342頁
- (45) 宮里朝光『向姓世系圖』向姓世系圖刊行会, 1993, 115頁
- (46) 糸数兼治「蔡温の思想とその時代」, 琉球新報社『新琉球史—近世編(下)—』一九九〇年, 185～186頁
- (47) 真喜志きさ子『琉球天女考』沖縄タイムス社, 1993, 186頁
- (48) 前掲23), 161頁
- (49) 前掲27), 271～276頁

- (50) 前掲 22), 281 頁
- (51) 同上, 186 頁
- (52) 前掲 23), 188 頁
- (53) 塚田清策『文字から見た沖縄文化の史的研  
究』錦正社, 1968, 241 ~ 242 頁
- (54) 前掲 27), 200 ~ 201 頁
- (55) 朝鮮総督府『朝鮮の風水』国書刊行会,  
1972, 17 頁
- (56) 前掲 23), 187 頁
- (57) 脇野博・加藤衛弘『日本農書全集 57 林業 2  
式拾番山御書付・林政八書 全』農山漁村文  
化協会, 1997, 238 ~ 258 頁
- (58) 渡邊欣雄『風水 気の景観地理学』人文書院,  
1994, 105 頁
- (59) 前掲 27), 39 ~ 42 頁
- (60) 前掲 23), 227 頁
- (61) 同上, 133 ~ 134 頁
- (62) 前掲 53), 244 ~ 246 頁
- (63) 前掲 16), 800 ~ 821 頁, 山本欣一・遠藤  
庄治・福田晃『日本伝説大系 第 15 卷 南  
島編』みずうみ書房, 1989, 393 ~ 481 頁
- (64) 沖縄県立埋蔵文化センター『中城御殿跡一  
県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書  
(I) 一』, 2010, 9 頁
- (65) 琉球国絵図史料集編集委員会沖縄県教育庁  
文化課『琉球国絵図史料集 第三集一天保国  
絵図・首里古地図及び関連資料一』1994, 44  
~ 45 頁
- (66) 沖縄県教育委員会文化課『沖縄県歴史の道  
調査報告書一國頭・中頭方西海道 (I) 弁ヶ  
岳参詣道一』1985, 92 ~ 93 頁
- (67) 前掲 44), 120 頁
- (68) 前掲 27), 230 頁
- (69) 谷川健一『日本庶民生活資料集成 第  
二十七卷 三国交流史』三一書房, 1981,  
600 頁
- (70) 前掲 23), 29 頁
- (71) 前掲 53), 243 ~ 244 頁
- (72) 前掲 45), 120 頁
- (73) 前掲 27), 431 頁
- (74) 宮田登『妖界の民俗学』筑摩書房, 2002,  
248 頁
- (75) 前掲 16), 26 頁
- (76) 前掲 53), 177 ~ 178 頁
- (77) 前掲 27), 47 頁
- (78) 同上, 56 頁
- (79) 『古事類苑 歳時部』吉川弘文館, 1976,  
1316 頁
- (80) 前掲 23), 390 頁
- (81) 村山修一『天神御霊信仰』塙書房, 1996,  
73 頁
- (82) 同上, 77 頁
- (83) 佐々木高弘著・小松和彦監修『京都妖界案  
内』大和書房, 2012, 161 ~ 163 頁